

## Sanshirō Chapter 4 (Natsume Sōseki)

三四郎の魂がふわつき出した。講義を聞いていると、遠方に聞こえる。わるくすると肝要な事を書き落とす。はなはだしい時はひとの耳を損料で借りているような気がする。三四郎はばかばかしくてたまらない。仕方なしに、与次郎に向かって、どうも近ごろは講義がおもしろくないと言いだした。与次郎の答はいつも同じことであった。

「講義がおもしろいわげがない。君はいなか者だから、いまに偉い事になると思って、今日までしんぼうして聞いていたんだらう。愚の至りだ。彼らの講義は開關以来こんなものだ。いまさら失望したってしかたがないや」

「そういうわけでもないが……」三四郎は弁解する。与次郎のへらへら調と、三四郎の重苦しい口のききようが、不釣合ではなはだおかしい。

こういう問答を二、三度繰り返しているうちに、いつのまにか半月ばかりたった。三四郎の耳は漸々借りものでないようになってきた。すると今度は与次郎のほうから、三四郎に向かって、

「どうも妙な顔だな。いかにも生活に疲れているような顔だ。世紀末の顔だ」と批評し出した。三四郎は、この批評に対しても依然として、

「そういうわけでもないが……」を繰り返していた。三四郎は世紀末などという言葉聞いてうれしがるほどに、まだ人工的の空気に触れていなかった。またこれを興味ある玩具として使用しうるほどに、ある社会の消息に通じていなかった。ただ生活に疲れているという句が少し気にいった。なるほど疲れだしたようでもある。三四郎は下痢のためばかりとは思わなかった。けれども大いに疲れた顔を標榜するほど、人生観のハイカラでもなかった。それでこの会話はそれぎり発展しずに済んだ。

そのうち秋は高くなる。食欲は進む。二十三の青年がとうてい人生に疲れていることができない時節が来た。三四郎はよく出る。大学の池の周囲もだいぶん回ってみたが、べつだんの変もない。病院の前も何べんとなく往復したが普通の人間に会うばかりである。また理科大学の穴倉へ行って野々宮君に聞いてみたら、妹はもう病院を出たと言う。玄関で会った

女おんなの事ことを話はなそうと思おもったが、先方さきが忙いそがしそうなので、つい遠慮えんりょしてやめてしまった。今度こんど大久保おおくぼへ行ってゆっくり話せば、名前なまえも素姓すじょうもたいていはわかることだから、せかずに引き取ひきとった。そうして、ふわふわして方々ほうぼうある歩たばたいている。田端たばただの、道灌山どうかんやまだの、染井そめいの墓地ぼちだの、巢鴨すがもの監獄かんごくだの、護国寺ごこくじだの、——三四郎あらいは新井やくしの薬師あらいまでも行った。新井あらいの薬師やくしの帰かえりに、大久保おおくぼへ出て野々宮君うちの家うちへ回おちあいろうと思おもったら、落合おちあいの火葬場やきばの辺へんで道みちを間違まちがえて、高田たかたへ出たかたたので、目白めじろから汽車きしゃへ乗のって帰なった。汽車なの中でみやげなかに買かった栗くりを一人ひとりでさんざん食くった。その余あまりはあくる日ひ与次郎よじろうが来来て、みんな平たいらげた。

三四郎よかいはふわふわすればするほど愉快はじになってきた。初めはじのうちうちはあまり講義こうぎに念ねんを入いれ過ぎたので、耳みみが遠とおくなって筆記ひっきに困こまったが、近ちかごろはたいていに聞きいているからなんともない。講義こうぎ中ちゆうにいろいろな事ことを考かんがえる。少すこしぐらい落おとしても惜おしい気きも起おこらない。よく観かん察さつしてみみると与次郎よかいはじめみんな同おなじことである。三四郎よかいはこれくらいでいいものだろうと思おもい出した。

三四郎よかいがいろいろ考かんがえるうちに、時々ときどき例れいのリボンリボンが出てくる。そうすると気きがかりになる。はなはだ不愉快ふゆかいになる。すぐ大久保おおくぼへ出でかけてみみたくなる。しかし想像そうぞうの連鎖れんさやら、外界がいの刺激しげきやらで、しばらくするとまぎれてしまう。だからだいたいゆめはのん気みである。それで夢ゆめを見みている。大久保おおくぼへはなかなか行いかない。

ある日ひの午後ごさんしろう三四郎れいは例れいのごとくぶらついて、団子坂だんござかの上うえから、左ひだりへ折おれて千駄木林町せんだぎはやしちゆうの広ひろい通とおりへ出でた。秋晴あきばれといいって、このごろは東京とうきようの空そらもいなかのように深ふかく見みえる。ここういいう空したの下いに生おもていおると思あたまうだけでも頭あたまははつきりする。そのうのえ、野のへ出もうれば申ぶんし分ぶんはない。気きがのびたましいのびおおぞらして魂たましいがおお大空おおほどの大おおきさになる。それそうたいでいてからだ総そうたい体たいがしまうってくる。だらしはるのない春はるのちがのどかさちがとは違ちがう。三四郎よかいは左さ右みぎの生垣きゆうをないがめいながら、生うまれてはうじめての東京あきの秋あきをかきぎきつつやきって来きた。

坂下さかしたでは菊人形きくにんぎようが二に、三日さんにち前まえ開業かいぎようしたばかりである。坂さかを曲まがる時ときは幟のぼりさえ見みえた。今いまはただ声こゑだけ聞きこえる、どんちゃんとどんちゃんと遠とおくからはやしている。そのはやしおとの音おとが、下したの方ほうから次第しだいに浮うき上あがすってきて、澄すみ切きった秋くうきの空なかの中なかへ広ひろがり尽つくすと、ついにはきわめて稀薄きはくな波なみになる。そのまた余波よはが三四郎よかいの鼓膜こまくのそばそばまで来きてしさぜんにとまる。騒さわがししいというよりはかえこころもっていい心こころ持もちちである。

時に突然左の横町から二人あらわれた。その一人が三四郎を見て、「おい」と言う。

与次郎の声はきょうにかぎって、几帳面である。その代り連がある。三四郎はその連を見た時、はたして日ごろの推察どおり、青木堂で茶を飲んでいて人が、広田さんであるということに悟った。この人とは水蜜桃以来妙な関係がある。ことに青木堂で茶を飲んで煙草をのんで、自分を図書館に走らしてよりこのかた、いっそうよく記憶にしまっている。いつ見ても神主のような顔に西洋人の鼻をつけている。きょうもこのあいだの夏服で、べつだん寒そうな様子もない。

三四郎はなんとか言って、挨拶をしようと思ったが、あまり時間がたっているので、どう口をきいていいかわからない。ただ帽子を取って礼をした。与次郎に対しては、あまり丁寧すぎる。広田に対しては、少し簡略すぎる。三四郎はどっちつかずの中間にでた。すると与次郎が、すぐ、

「この男は私の同級生です。熊本の高等学校からはじめて東京へ出て来た——」と聞かれもしないさきからいなか者を吹聴しておいて、それから三四郎の方を向いて、

「これが広田先生。高等学校の……」とわけもなく双方を紹介してしまった。

この時広田先生は「知ってる、知ってる」と二へん繰り返して言ったので、与次郎は妙な顔をしている。しかしなぜ知ってるんですかなどとめんどろな事は聞かなかった。ただちに、

「君、この辺に貸家はないか。広くて、きれいな、書生部屋のある」と尋ねだした。

「貸家はと……ある」

「どの辺だ。きたなくっちゃいけないぜ」

「いやきれいなものがある。大きな石の門が立っているのがある」

「そりゃうまい。どこだ。先生、石の門はいいですな。ぜひそれにしようじゃありませんか」と与次郎は大いに進んでいる。

「石の門はいかん」と先生が言う。

「いかん？ そりゃ<sup>こま</sup>困る。なぜいかんです」

「なぜでもいかん」

「石の門はいいがな。新<sup>あたら</sup>しい男<sup>だんしゃく</sup>爵<sup>きやく</sup>のようでいいじゃないですか、先生」

与次郎はまじめである。広田先生はにやにや<sup>わら</sup>笑っている。とうとうまじめのほう<sup>か</sup>が勝<sup>か</sup>って、ともかくも見る<sup>み</sup>ことに相談<sup>そうだん</sup>ができて、三四郎<sup>さんしろう</sup>が案内<sup>あんない</sup>をした。

よこちょう ひ かえ うらどお で はんちょう きた き ところ つ あた おも  
横町<sup>よこちょう</sup>をあとへ引き返して、裏通り<sup>うらどお</sup>へ出ると、半町<sup>はんちょう</sup>ばかり北<sup>きた</sup>へ来た<sup>き</sup>所<sup>ところ</sup>に、突き当り<sup>つ</sup>と思わ<sup>おも</sup>れるような小路<sup>こうじ</sup>がある。その小路<sup>な</sup>の中<sup>なか</sup>へ三四郎<sup>さんしろう</sup>は二人<sup>ふたり</sup>を連れ込<sup>つ</sup>んだ。まっすぐ<sup>こ</sup>に行くと植木屋<sup>い</sup>の庭<sup>うえきや</sup>へ出てしまう。三人<sup>さんにん</sup>は入口<sup>いりぐち</sup>の五<sup>ご</sup>、六<sup>ろ</sup>間<sup>け</sup>手前<sup>てまえ</sup>でとまった。右手<sup>みぎて</sup>にかなり大きな御影<sup>おおみかげ</sup>の柱<sup>はしら</sup>が二本<sup>にほんた</sup>立<sup>た</sup>っている。扉<sup>とびら</sup>は鉄<sup>てつ</sup>である。三四郎<sup>さんしろう</sup>がこれだ<sup>い</sup>と言う。なるほど<sup>かしやふだ</sup>貸家<sup>か</sup>札<sup>ふだ</sup>がついている。

「こりゃ<sup>おそ</sup>恐ろしいもんだ」と言いながら、与次郎<sup>よじろう</sup>は鉄<sup>てつ</sup>の扉<sup>か</sup>をうんと押<sup>お</sup>したが、錠<sup>じょう</sup>がおりてい<sup>い</sup>る。「ちょっとお待ちなさい聞いてくる」と言うやいなや、与次郎<sup>よじろう</sup>は植木屋<sup>い</sup>の奥<sup>おく</sup>の方<sup>ほう</sup>へ駆け込<sup>こ</sup>んで行<sup>い</sup>った。広田<sup>ひろた</sup>と三四郎<sup>さんしろう</sup>は取り残<sup>と</sup>された<sup>の</sup>ようなものである。二人<sup>ふたり</sup>で話<sup>はなし</sup>を始<sup>はじ</sup>めた。

とうきょう  
「東京<sup>とうきょう</sup>はどうです」

「ええ……」

ひろ  
「広<sup>ひろ</sup>いばかりで<sup>ま</sup>きたない<sup>き</sup>所<sup>ところ</sup>でしょう」

「ええ……」

ふじさん ひかく  
「富士山<sup>ふじさん</sup>に比較<sup>ひかく</sup>する<sup>ま</sup>ようなものはなんにもない<sup>き</sup>でしょう」

三四郎<sup>さんしろう</sup>は富士山<sup>ふじさん</sup>の事<sup>こと</sup>をまるで忘<sup>わす</sup>れていた。広田先生<sup>ひろたせんせい</sup>の注意<sup>ちゆうい</sup>によって、汽車<sup>きしゃ</sup>の窓<sup>まど</sup>からはじめてながめた富士<sup>ふじ</sup>は、考<sup>かんが</sup>え出<sup>だ</sup>すと、なるほど<sup>すうこう</sup>崇高<sup>たうこう</sup>なものである。ただ<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>自分<sup>じぶん</sup>の頭<sup>あたま</sup>の中<sup>なか</sup>にごたごた<sup>ごたごた</sup>している世相<sup>せそう</sup>とは、とても比較<sup>ひかく</sup>にならない。三四郎<sup>さんしろう</sup>はあの時<sup>とき</sup>の印象<sup>いんしょう</sup>をいつのまにか<sup>と</sup>取り落<sup>おと</sup>していたのを恥<sup>は</sup>ずかしく思<sup>おも</sup>った。すると、

きみ ふじさん ほんやく  
「君<sup>きみ</sup>、不二山<sup>ふじさん</sup>を翻<sup>ほんやく</sup>訳<sup>やく</sup>してみた<sup>い</sup>ことがありますか」と意外<sup>いがい</sup>な質<sup>しつもん</sup>問<sup>もん</sup>を放<sup>はな</sup>たれた。

「翻訳とは……」

「自然を翻訳すると、みんな人間に化けてしまうからおもしろい。崇高だとか、偉大だとか、雄壮だとか」

三四郎は翻訳の意味を了した。

「みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に翻訳することのできないものには、自然が何も人格上の感化を与えていない」

三四郎はまだあとがあるかと思って、黙って聞いていた。ところが広田さんはそれでやめてしまった。植木屋の奥の方をのぞいて、

「佐々木は何をしているのかしら。おそいな」とひとりごとのように言う。

「見てきましょうか」と三四郎が聞いた。

「なに、見にいったって、それで出てくるような男じゃない。それよりここに待ってるほうが手間がかからないでいい」と言って枳殻の垣根の下にしゃがんで、小石を拾って、土の上へ何かかき出した。のん気なことである。与次郎ののん気とは方角が反対で、程度がほぼ相似ている。

ところへ植込みの松の向こうから、与次郎が大きな声を出した。

「先生先生」

先生は依然として、何かかいている。どうも燈明台のようである。返事をしないので、与次郎はしかたなしに出て来た。

「先生ちょっと見てごらんなさい。いい家だ。この植木屋で持ってるんです。門をあけさせてもいいが、裏から回ったほうが早い」

三人は裏から回った。雨戸をあけて、一間一間見て歩いた。中流の人が住んで恥ずかしくないようにできている。家賃が四十円で、敷金が三か月分だという。三人はまた表へ出た。

「なんで、あんまりっぱな家を見るのだ」と広田さんが言う。

「なんで見るって、ただ見るだけだからいいじゃありませんか」と与次郎は言う。

「借りもしないのに……」

「なに借りるつもりでいたんです。ところが家賃をどうしても二十五円にしようと言わない……」

広田先生は「あたりまえさ」と言ったぎりである。すると与次郎が石の門の歴史を話し出した。このあいだまで出入りの屋敷の入口にあったのを、改築のときもらってきて、すぐあすこへ立てたのだと言う。与次郎だけに妙な事を研究してきた。

それから三人はもとの大通りへ出て、動坂から田端の谷へ降りたが、降りた時分には三人ともただ歩いている。貸家の事はみんな忘れてしまった。ひとり与次郎が時々石の門のことを言う。麴町からあれを千駄木まで引いてくるのに、手間が五円ほどかかったなどと言う。あの植木屋はだいたい金持ちらしいなどとも言う。あすこへ四十円の貸家を建てて、ぜんたいだれが借りるだろうなどとよけいなことまで言う。ついには、いまに借手がなくなってきつと家賃を下げるに違いないから、その時もう一ぺん談判してぜひ借りようじゃありませんかという結論であった。広田先生はべつに、そういう了見もないとみえて、こう言った。

「君が、あんまりよけいな話ばかりしているものだから、時間がかかってしかたがない。い

「よほど長くかかりましたか。何か絵をかいていましたね。先生もずいぶんのん気だな」

「どっちがのんきかわかりやしない」

「ありやなんの絵です」

先生は黙っている。その時三四郎がまじめな顔をして、

「燈台じゃないですか」と聞いた。かき手と与次郎は笑い出した。

「燈台は奇抜だな。じゃ野々宮宗八さんをかいていらしたんですね」

「なぜ」

「野々宮さんは外国じゃ光ってるが、日本じゃまっ暗だから。——だれもまるで知らない。それでわずかばかりの月給をもらって、穴倉へたてこもって、——じつに割に合わない商売だ。野々宮さんの顔を見るたびに気の毒になってたまらない」

「君などは自分のすわっている周囲方二尺ぐらいの所をぼんやり照らすだけだから、丸行燈のようなものだ」

丸行燈に比較された与次郎は、突然三四郎の方を向いて、

「小川君、君は明治何年生まれかな」と聞いた。三四郎は簡単に、

「ぼくは二十三だ」と答えた。

「そんなものだろう。——先生ぼくは、丸行燈だの、雁首だのっていうものが、どうもきらいですがね。明治十五年以後に生まれたせいかもしれないが、なんだか旧式でいやな心持ちがする。君はどうだ」とまた三四郎の方を向く。三四郎は、

「ぼくはべつだんきらいでもない」と言った。

「もっとも君は九州のいなかから出たばかりだから、明治元年ぐらいの頭と同じなんだろう」

三四郎も広田もこれに対してべつだんの挨拶をしなかった。少し行くと古い寺の隣の杉林を切り倒して、きれいに地ならしをした上に、青ペンキ塗りの西洋館を建てている。広田先生は寺とペンキ塗りを等分に見ていた。

「アナクロニズムにほんぶっしつかいせいしんかいくだんとうみょうだいし  
「時代錯誤だ。日本の物質界も精神界もこのとおりだ。君、九段の燈明台を知っているだろう」とまた燈明台が出た。「あれは古いもので、江戸名所図会に出ている」

「先生<sup>じょうだん</sup> 冗談<sup>じょうだん</sup> 言<sup>い</sup>っちゃいけません。なんぼ九段の燈明台が古いたって、江戸名所図会に出ちやたいへんだ」

広田先生<sup>ひろた だ</sup>は笑<sup>わら</sup>い出<sup>だ</sup>した。じつは東京名所<sup>とうきょうめいしょ</sup>という錦絵<sup>にしきえ</sup>の間違<sup>まちが</sup>いだということがわかった。先生<sup>せんせい</sup>の説<sup>せつ</sup>によると、こんなに古い燈台<sup>のこ</sup>が、まだ残<sup>のこ</sup>っているそばに、偕行社<sup>かいこうしゃ</sup>という新式<sup>しんしき</sup>の煉瓦<sup>れんが</sup>作り<sup>づく</sup>ができた。二つ並<sup>ふたなら</sup>べて見るとじつにばかげている。けれどもだれも氣<sup>き</sup>がつかない、平氣<sup>へいき</sup>でいる。これが日本の社会<sup>しゃかい</sup>を代<sup>だい</sup>表<sup>ひょう</sup>しているんだと言う。

与次郎<sup>よじろう</sup>も三四郎<sup>さんしろう</sup>もなるほどと言<sup>い</sup>ったまま、お寺<sup>と</sup>の前<sup>まへ</sup>を通<sup>と</sup>り越<sup>こ</sup>して、五<sup>ご</sup>、六<sup>ろく</sup>町<sup>ちやう</sup>来<sup>く</sup>ると、大<sup>お</sup>きな黒<sup>くろ</sup>い門<sup>もん</sup>がある。与次郎<sup>よじろう</sup>が、ここを抜<sup>ぬ</sup>けて道灌山<sup>どうかんやま</sup>へ出<sup>い</sup>ようと言<sup>い</sup>出した。抜<sup>ぬ</sup>けてもいいのかと念<sup>ねん</sup>を押<sup>お</sup>すと、なにこれは佐竹<sup>さたけ</sup>の下屋敷<sup>しもやしき</sup>で、だれでも通<sup>と</sup>れるんだからかまわないと主<sup>しゅ</sup>張<sup>ちやう</sup>するので、二人<sup>ふたり</sup>ともその氣<sup>き</sup>になって門<sup>かど</sup>をくぐって、藪<sup>やぶ</sup>の下<sup>した</sup>を通<sup>と</sup>って古<sup>い</sup>い池<sup>いけ</sup>のそばまで来<sup>き</sup>ると、番人<sup>ばんにん</sup>が出てきて、たいへん三人<sup>さんにん</sup>をしかりつけた。その時<sup>とき</sup>与次郎<sup>よじろう</sup>はへいへいと言<sup>い</sup>って番人<sup>ばんにん</sup>にあやまった。

それから谷中<sup>やなか</sup>へ出<sup>で</sup>て、根津<sup>ねづ</sup>を回<sup>まわ</sup>って、夕方<sup>ゆうがた</sup>に本郷<sup>ほんごう</sup>の下宿<sup>げしゆく</sup>へ帰<sup>かえ</sup>った。三四郎<sup>さんしろう</sup>は近<sup>きん</sup>来<sup>らい</sup>にない氣<sup>き</sup>楽<sup>らく</sup>な半日<sup>はんじち</sup>を暮<sup>く</sup>らしたように感<sup>かん</sup>じた。

翌日<sup>よくじつ</sup>学校<sup>がっこう</sup>へ出<sup>で</sup>てみると与次郎<sup>よじろう</sup>がいない。昼<sup>ひる</sup>から来<sup>く</sup>るかと思<sup>おも</sup>ったが来<sup>こ</sup>ない。図書館<sup>としょかん</sup>へもはいつたがやっぱり見<sup>み</sup>当<sup>あた</sup>らなかつた。五<sup>ご</sup>時から六<sup>ろく</sup>時まで純<sup>じゆん</sup>文<sup>ぶん</sup>科<sup>か</sup>共<sup>きやう</sup>通<sup>つう</sup>の講義<sup>かうぎ</sup>がある。三四郎<sup>さんしろう</sup>はこれへ出<sup>い</sup>た。筆<sup>ひ</sup>記<sup>き</sup>するには暗<sup>くら</sup>すぎる。電燈<sup>でんとう</sup>がつくには早<sup>はや</sup>すぎる。細<sup>ほ</sup>長<sup>そな</sup>い窓<sup>まど</sup>の外<sup>そと</sup>に見<sup>み</sup>える大<sup>おお</sup>きな櫛<sup>け</sup>の枝<sup>え</sup>の奥<sup>おく</sup>が、次第<sup>しだい</sup>に黒<sup>くろ</sup>くなる時<sup>とき</sup>分<sup>ぶん</sup>だから、部<sup>ぶ</sup>屋<sup>や</sup>の中<sup>なか</sup>は講<sup>かう</sup>師<sup>し</sup>の顔<sup>かお</sup>も聴<sup>ちやう</sup>講<sup>かう</sup>生<sup>せい</sup>の顔<sup>かお</sup>も等<sup>ひと</sup>しくぼんやりしている。したがって暗<sup>くら</sup>闇<sup>やみ</sup>で饅<sup>まん</sup>頭<sup>じゆう</sup>を食<sup>く</sup>うように、なんとなく神<sup>しん</sup>秘<sup>び</sup>的<sup>てき</sup>である。三四郎<sup>さんしろう</sup>は講<sup>かう</sup>義<sup>ぎ</sup>がわからないところ<sup>ところ</sup>が妙<sup>みやう</sup>だと思<sup>おも</sup>った。頬<sup>ほ</sup>杖<sup>おづえ</sup>を突<sup>つ</sup>いて聞<sup>き</sup>いていると、神<sup>しん</sup>經<sup>けい</sup>がにぶくなって、氣<sup>き</sup>が遠<sup>と</sup>くなる。これでこそ講<sup>かう</sup>義<sup>ぎ</sup>の価<sup>か</sup>値<sup>ち</sup>があるよな心<sup>こころ</sup>持<sup>も</sup>ちがする。ところへ電<sup>でん</sup>燈<sup>とう</sup>がぱつとついで、万<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>がや<sup>や</sup>明<sup>めい</sup>瞭<sup>りやう</sup>になつた。す<sup>す</sup>ると急<sup>きゆう</sup>に下<sup>げ</sup>宿<sup>しゆく</sup>へ帰<sup>かえ</sup>って飯<sup>めし</sup>が食<sup>く</sup>いたくなつた。先生<sup>せんせい</sup>もみんなの心<sup>こころ</sup>を察<sup>さつ</sup>して、い<sup>い</sup>かげんに講<sup>かう</sup>義<sup>ぎ</sup>を切<sup>き</sup>り上<sup>あ</sup>げてくれた。三四郎<sup>さんしろう</sup>は早<sup>はや</sup>足<sup>あし</sup>で追<sup>おい</sup>分<sup>わけ</sup>まで帰<sup>かえ</sup>ってくる。

きものぬか<sup>ぬか</sup>ぜんむ<sup>ぜんむ</sup>と、膳<sup>うえ</sup>の上<sup>うへ</sup>に、茶<sup>ちや</sup>碗<sup>わん</sup>蒸<sup>むし</sup>といっしょに手<sup>て</sup>紙<sup>がみ</sup>が一本<sup>いっほん</sup>載<sup>の</sup>せてある。その上<sup>うわ</sup>封<sup>ふう</sup>を見<sup>み</sup>たとき、三四郎<sup>さんしろう</sup>はすぐ母<sup>はは</sup>から来<sup>き</sup>たものだと悟<sup>さと</sup>つた。すま<sup>すま</sup>んことだがこの半<sup>はん</sup>月<sup>つき</sup>あまり母<sup>はは</sup>の事<sup>こと</sup>はまるで忘<sup>わす</sup>れていた。きのうからきょうへかけては時<sup>アナクロニズム</sup>代<sup>だい</sup>錯<sup>さく</sup>誤<sup>ご</sup>だの、不<sup>ふ</sup>二<sup>に</sup>山<sup>さん</sup>の人格<sup>じんかく</sup>だ



の、神秘的な講義だので、例の女の影もいっこう頭の中へ出てこなかった。三四郎はそれで満足である。母の手紙はあとでゆっくり見ることとして、とりあえず食事を済まして、煙草を吹かした。その煙を見るとさっきの講義を思い出す。

そこへ与次郎がふらりと現われた。どうして学校を休んだかと聞くと、貸家捜しで学校どころじゃないそうである。

「そんなに急いで越すのか」と三四郎が聞くと、

「急ぐって先月中に越すはずのところをあさつての天長節まで待たしたんだから、どうしたってあしたじゅうに捜さなければならない。どこか心当りはないか」と言う。

こんなに忙しがるくせに、きのうは散歩だか、貸家捜しだかわからないようにぶらぶらつぶしていた。三四郎にはほとんど合点がいかない。与次郎はこれを解釈して、それは先生がいつしよだからさと言った。「元来先生が家を探すなんて間違っている。けっして捜したことの無い男なんだが、きのうはどうかしていたに違いない。おかげで佐竹の邸でひどい目にしかられていい面の皮だ。——君どこかないか」と急に催促する。与次郎が来たのはまったくそれが目的らしい。よくよく原因を聞いてみると、今の持ち主が高利貸で、家賃をむやみに上げるのが、業腹だというので、与次郎がこっちからたちのきを宣告したのだそうだ。それでは与次郎に責任があるわけだ。

「きょうは大久保まで行って見たが、やっぱりない。——大久保といえ、ついでに宗人さんの所に寄って、よし子さんに会ってきた。かわいそうにまだ色光沢が悪い。——辣薑性の美人——おっかさんが君によろしく言ってくれてことだ。しかしその後はあの辺も穏やかなようだ。轢死もあれぎりないそうだ」

与次郎の話はそれから、それへと飛んで行く。平生から締まりのないうえに、きょうは家捜しで少しせきこんでいる。話が一段落つくと、相の手のように、どこかないかないかと聞く。しまいには三四郎も笑い出した。

そのうち与次郎の尻が次第におちついてきて、燈火親しむべしなどという漢語さえ借用してうれしがるようになった。話題ははしなく広田先生の上に落ちた。

「君の<sup>きみ</sup>所<sup>ところ</sup>の先生<sup>な</sup>の名はなんというのか」

「名は<sup>ちょう</sup>蓑<sup>ゆび</sup>」と指<sup>か</sup>で書<sup>み</sup>いて見<sup>く</sup>せて、「<sup>く</sup>艸<sup>かん</sup>冠<sup>むり</sup>がよけいだ。字<sup>じ</sup>引<sup>びき</sup>にあるかしらん。妙<sup>みょう</sup>な名<sup>な</sup>をつけたものだね」と言<sup>い</sup>う。

「<sup>こう</sup>高等<sup>とう</sup>学校<sup>がっこう</sup>の先生<sup>せんせい</sup>か」

「昔<sup>むかし</sup>から今日<sup>こんにち</sup>に至<sup>いた</sup>るまで高等<sup>こう</sup>学校<sup>とう</sup>の先生<sup>せんせい</sup>。えらいものだ。十<sup>じゅう</sup>年<sup>ねん</sup>一<sup>いち</sup>日<sup>じつ</sup>のごとしというが、も<sup>う</sup>十二<sup>じゅうに</sup>、三年<sup>さんねん</sup>になるだろう」

「<sup>こども</sup>子供<sup>こども</sup>はおるのか」

「子供<sup>こども</sup>どころか、まだ<sup>ひとりみ</sup>独<sup>ひとり</sup>身<sup>み</sup>だ」

三四郎<sup>しやうらう</sup>は少し<sup>おどろ</sup>驚<sup>おどろ</sup>いた。あ<sup>とし</sup>の年<sup>とし</sup>まで一<sup>ひとり</sup>人<sup>ひとり</sup>でいられるものかとも<sup>うたが</sup>疑<sup>うたが</sup>った。

「なぜ<sup>おく</sup>奥<sup>おく</sup>さん<sup>さん</sup>をもらわないの<sup>のだらう</sup>だろう」

「そこが先生<sup>せんせい</sup>の先生<sup>せんせい</sup>たるところで、あれでたいへんな<sup>りろんか</sup>理<sup>り</sup>論<sup>ろん</sup>家<sup>か</sup>なんだ。細<sup>さい</sup>君<sup>くん</sup>をもらって<sup>き</sup>みないさ<sup>き</sup>から、細<sup>さい</sup>君<sup>くん</sup>はいかんものと理<sup>り</sup>論<sup>ろん</sup>できま<sup>ぐ</sup>っているんだそう<sup>だ</sup>。愚<sup>ぐ</sup>だよ。だからしじゅう<sup>むじゅん</sup>矛<sup>む</sup>盾<sup>じゅん</sup>ばかりしている。先生<sup>せんせい</sup>、東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>ほどきたない所<sup>ところ</sup>はないように言<sup>い</sup>う。それで石<sup>いし</sup>の門<sup>もん</sup>を見<sup>み</sup>ると恐<sup>おそ</sup>れをなして、いかんいかんとか、りっぱすぎるとか言<sup>い</sup>うだろう」

「じゃ細<sup>さい</sup>君<sup>くん</sup>も<sup>こころ</sup>試<sup>し</sup>みに持<sup>も</sup>って<sup>も</sup>いたらよ<sup>よ</sup>かろう」

「大<sup>おお</sup>いによしとかなんとか言<sup>い</sup>うか<sup>か</sup>もしれない」

「先生<sup>せんせい</sup>は東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>がきたないとか、日本<sup>にほん</sup>人<sup>じん</sup>が醜<sup>みにく</sup>いとか言<sup>い</sup>うが、洋<sup>よう</sup>行<sup>こう</sup>でもしたことがあるのか」

「なに<sup>ひと</sup>するもんか。ああ<sup>ばん</sup>いう人<sup>じん</sup>なんだ。万<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>頭<sup>あたま</sup>のほう<sup>じじつ</sup>が事<sup>じ</sup>実<sup>じつ</sup>より発<sup>は</sup>達<sup>たつ</sup>しているんだからあ<sup>あ</sup>なるんだね。その代<sup>かわ</sup>り西<sup>せい</sup>洋<sup>やう</sup>は写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>で研<sup>けん</sup>究<sup>きゆう</sup>している。パリの凱<sup>がい</sup>旋<sup>せん</sup>門<sup>もん</sup>だの、ロ<sup>ろ</sup>ン<sup>ん</sup>ド<sup>ん</sup>の議<sup>ぎ</sup>事<sup>じ</sup>堂<sup>どう</sup>だの、た<sup>も</sup>くさん持<sup>も</sup>っている。あ<sup>にほん</sup>の写<sup>りつ</sup>真<sup>しん</sup>で日本<sup>にほん</sup>を律<sup>りつ</sup>するんだからたま<sup>たま</sup>らない。きたないわけさ。それで自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の住<sup>す</sup>んでる所<sup>ところ</sup>は、い<sup>ぞん</sup>くらきたなく<sup>い</sup>くても存<sup>ぞん</sup>外<sup>がい</sup>平<sup>へい</sup>気<sup>き</sup>だから不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>だ」

「<sup>さんとうきしゃ</sup>の  
三等汽車へ乗っておったぞ」

「きたないきたないって<sup>ふへい</sup>不平を言やしないか」

「いやべつに不平も言わなかった」

「しかし先生は<sup>てつがくしゃ</sup>哲学者だね」

「<sup>がっこう</sup>学校で<sup>おし</sup>哲学でも教えているのか」

「いや学校じゃ<sup>えいご</sup>英語だけしか<sup>う</sup>受け持っていないがね、あの<sup>にんげん</sup>人間が、おのずから哲学にできあがっているからおもしろい」

「<sup>ちよじゆつ</sup>著述でもあるのか」

「<sup>なに</sup>何もない。<sup>ときどきろんぶん</sup>時々論文を書く<sup>か</sup>事はあるが、ちつとも<sup>はんきやう</sup>反響がない。あれじゃだめだ。まるで<sup>せけん</sup>世間が知らないんだからしょうがない。先生、<sup>まるあんどん</sup>ぼくの事を丸行燈だと言ったが、<sup>ふうしじしん</sup>夫子自身は<sup>いだい</sup>偉大な<sup>くらやみ</sup>暗闇だ」

「<sup>よ</sup>どうかして、<sup>なか</sup>世の中へ<sup>で</sup>出たらよさそうなものだな」

「出たらよさそうなものだって、——先生、自分じゃなんにもやらない人だからね。<sup>だいち</sup>第一ぼくがいなけりや<sup>さんど</sup>三度の<sup>めし</sup>飯さえ<sup>く</sup>食えない人なんだ」

<sup>さんしろう</sup>三四郎はまさかといわぬばかりに<sup>わら</sup>笑い出した。

「<sup>うそ</sup>嘘じゃない。<sup>き</sup>気の<sup>どく</sup>毒なほどなんにもやらないんでね。なんでも、ぼくが<sup>げじよ</sup>下女に<sup>めい</sup>命じて、先生の<sup>き</sup>気にいるように<sup>しまつ</sup>始末をつけるんだが——そんな<sup>さまつ</sup>瑣末な事はとにかく、これから<sup>おお</sup>大いに<sup>かつどう</sup>活動して、先生を<sup>ひと</sup>一つ<sup>だいがくきやうじゆ</sup>大学教授にしてやろうと思う」

<sup>よじろう</sup>与次郎はまじめである。三四郎はその<sup>たいげん</sup>大言に<sup>おどろ</sup>驚いた。驚いてもかまわない。驚いたままに<sup>しんこう</sup>進行して、<sup>しまいに</sup>、

「引越しをする時はぜひ手伝いに来てくれ」と頼んだ。まるで約束のできた家がとうからあるごとき口吻である。

よじろう かえ じゅうじちか ひとり はださむ かん  
与次郎の帰ったのはかれこれ十時近くである。一人ですわっていると、どことなく肌寒の感  
じがする。ふと気がついたら、机の前の窓がまだたてずにあった。障子をあけると月夜だ。  
め ふ ふゆかい ひのき あお ひか くろ かげ ふち すこ けむ み  
目に触れるたびに不愉快な檜に、青い光りがさして、黒い影の縁が少し煙って見える。檜  
にあき き めずら おも あまど  
に秋が来たのは珍しいと思いながら、雨戸をたてた。

さんしろう とこ べんきょうか ていかいか しょもつ  
三四郎はすぐ床へはいった。三四郎は勉強家というよりむしろ低徊家なので、わりあい書物  
よ を読まない。その代りある掬すべき情景にあうと、何べんもこれを頭の中で新たに  
よろこ 喜んでいる。そのほうが命に奥行があるような気がする。きょうも、いつもなら、神秘的  
こうぎ さいちゅう でんとう く かえ はは てがみ  
講義の最中に、ぱっと電燈がつくところなどを繰り返してうれしがるはずだが、母の手紙が  
あるので、まず、それから片づけ始めた。

しんぞう はちみつ しょうちゅう ま まいばんさかずき いっぱい の  
手紙には新蔵が蜂蜜をくれたから、焼酎を混ぜて、毎晩杯に一杯ずつ飲んでいるとあ  
る。新蔵は家の小作人で、毎年冬になると年貢米を二十俵ずつ持ってくる。いたって  
しょうじきもの かんしゃく つよ ときどきによぼう まき  
正直者だが、癩癩が強いので、時々女房を薪でなぐることがある。――三四郎は床の中  
で新蔵が蜂を飼い出した昔の事まで思い浮かべた。それは五年ほどまえである。裏の椎の木  
みつばち に さんびやくひき さ もみじょうご きけ ふ  
に蜜蜂が二、三百匹ぶら下がっていたのを見つけてすぐ籾漏斗に酒を吹きかけて、ことごとく  
いけどり 生捕にした。それからこれを箱へ入れて、出入りのできるような穴をあけて、日当りのい  
いし うえ す ひとつでは足りなくなる。二つ  
い石の上に据えてやった。すると蜂がだんだんふえてくる。箱が一つでは足りなくなる。二つ  
にする。また足りなくなる。三つにする。というふうにふやしていった結果、今ではなんでも  
ろっぽこ ななほこ ひとつはこ ねん いちど みつ き と  
六箱か七箱ある。そのうちの一箱を年に一度ずつ石からおろして蜂のために蜜を切り取る  
とっていた。毎年夏休みに帰るたびに蜜をあげましようと言わないことはないが、ついに持  
ってきたためしかなかった。が、今年はおぼえが急によくなって、年来の約束を履行したも  
のであろう。

へいたろう せきとう た み たの い ぎ  
平太郎がおやじの石塔を建てたから見にきてくれろと頼みにきたとある。行ってみると、木も  
くさ もはえていない庭の赤土のまん中に、御影石できていたそうである。平太郎はその御影  
じまん か やま き いくか いしや  
石が自慢ののだと書いてある。山から切り出すのに幾日とかかかって、それから石屋に頼んだ  
じゅうえんと ひやくしょう なに わかだんな だいがっこう  
ら十円取られた。百姓や何かにはわからないが、あなたのとこの若旦那は大学校へはい

っているくらいだから、石の善悪はきっとわかる。今度手紙のついでに聞いてみてくれ、そうして十円もかけておやじのためにこしらえてやった石塔をほめてもらってくれと言うんだそうだ。——三四郎はひとりでくすくす笑い出した。千駄木の石門よりよほど激しい。

大学の制服を着た写真をよこせとある。三四郎はいつか撮ってやろうと思いつつ、次へ移ると、案のごとく三輪田のお光さんが出てきた。——このあいだお光さんのおっかさんが来て、三四郎さんも近々大学を卒業なさることだが、卒業したら家の娘をもらってくれまいかという相談であった。お光さんは器量もよし気質も優しいし、家に田地もだいぶあるし、その上家と家との今までの関係もあることだから、そうしたら双方ともつごうがよいだろうと書いて、そのあとへ但し書がつけてある。——お光さんもうれしがらうだろう。——東京の者は氣心が知れないから私はいやじゃ。

三四郎は手紙を巻き返して、封に入れて、枕元へ置いたまま目を眠った。鼠が急に天井であばれだしたが、やがて静まった。

三四郎には三つの世界ができた。一つは遠くにある。与次郎のいわゆる明治十五年以前の香がする。すべてが平穩である代りにすべてが寝ぼけている。もっとも帰るに世話はいらない。もどろろとすれば、すぐにもどれる。ただいざとならない以上はもどる気がしない。いわば立退場のようなものである。三四郎は脱ぎ棄てた過去を、この立退場の中へ封じ込めた。なつかしい母さえここに葬ったかと思うと、急にもったいなくなる。そこで手紙が来た時だけは、しばらくこの世界に徘徊して旧歡をあたためる。

第二の世界のうちには、苔のはえた煉瓦造りがある。片すみから片すみを見渡すと、向こうの人の顔がよくわからないほどに広い閲覧室がある。梯子をかけなければ、手の届きかねるまで高く積み重ねた書物がある。手ずれ、指の垢で、黒くなっている。金文字で光っている。羊皮、牛皮、二百年前の紙、それからすべての上に積もった塵がある。この塵は二、三十年かかってようやく積もった尊い塵である。静かな明日に打ち勝つほどの静かな塵である。

第二の世界に動く人の影を見ると、たいてい不精な髭をはやしている。ある者は空を見て歩いている。ある者は俯向いて歩いている。服装は必ずきたない。生計はきっと貧乏である。

そうして晏如<sup>あんじょ</sup>としている。電車<sup>でんしゃ</sup>に取り巻<sup>と</sup>かれながら、太平<sup>たいへい</sup>の空気<sup>くうき</sup>を、通天<sup>つうてん</sup>に呼吸<sup>こきゅう</sup>してはばからない。このなかに入る者<sup>はい</sup>は、現世<sup>げんせい</sup>を知らないから不幸<sup>ふこう</sup>で、火宅<sup>かたく</sup>をのがれるから幸<sup>さいわ</sup>いである。広田先生<sup>ひろたせんせい</sup>はこの内<sup>うち</sup>にいる。野々宮君<sup>ののみやくん</sup>もこの内<sup>うち</sup>にいる。三四郎<sup>しやうら</sup>はこの内の空気<sup>くうき</sup>をほぼ解<sup>げ</sup>しえた所<sup>ところ</sup>にいる。出れば出られる。しかしせつかく解<sup>げ</sup>しかけた趣味<sup>しゆみ</sup>を思いきって捨<sup>す</sup>てるのも残念<sup>ざんねん</sup>だ。

第三<sup>だいさん</sup>の世界<sup>せかい</sup>はさんとして春<sup>はる</sup>のごとくうごいている。電燈<sup>でんとう</sup>がある。銀匙<sup>ぎんさじ</sup>がある。歓声<sup>かんせい</sup>がある。笑語<sup>しょうご</sup>がある。泡立<sup>あわだ</sup>つシャンパンの杯<sup>さかずき</sup>がある。そうしてすべての上<sup>うへ</sup>の冠<sup>かんむり</sup>として美<sup>うつく</sup>しい女性<sup>にょしやう</sup>がある。三四郎<sup>しやうら</sup>はその女性<sup>にょしやう</sup>の一人<sup>ひとり</sup>に口<sup>くち</sup>をきいた。一人<sup>ひとり</sup>を二<sup>に</sup>へん見た。この世界<sup>せかい</sup>は三四郎<sup>しやうら</sup>にとって最<sup>もっと</sup>も深厚<sup>しんこう</sup>な世界<sup>せかい</sup>である。この世界<sup>せかい</sup>は鼻<sup>はな</sup>の先<sup>さき</sup>にある。ただ近<sup>ちか</sup>づき難<sup>がた</sup>い。近<sup>ちか</sup>づき難<sup>がた</sup>い点<sup>てん</sup>において、天外<sup>てんがい</sup>の稲妻<sup>いなずま</sup>と一般<sup>いっぱん</sup>である。三四郎<sup>しやうら</sup>は遠<sup>とほ</sup>くからこの世界<sup>せかい</sup>をながめて、不思議<sup>ふしぎ</sup>に思<sup>おも</sup>う。自分<sup>じぶん</sup>がこの世界<sup>せかい</sup>のどこかへはいらなければ、その世界<sup>せかい</sup>のどこか<sup>どこか</sup>に欠陥<sup>けつかん</sup>ができるような気<sup>き</sup>がする。自分<sup>じぶん</sup>はこの世界<sup>せかい</sup>のどこか<sup>どこか</sup>の主人<sup>しゆじん</sup>公<sup>こう</sup>であるべき資格<sup>しかく</sup>を有<sup>ゆう</sup>しているらしい。それにもかかわらず、円満<sup>えんまん</sup>の發達<sup>はつたつ</sup>をこいねがうべきはずのこの世界<sup>せかい</sup>がかえってみずからを束縛<sup>そくばく</sup>して、自分<sup>じぶん</sup>が自由<sup>じゆう</sup>に出入<sup>でいり</sup>すべき通路<sup>つうろ</sup>をふさいでいる。三四郎<sup>しやうら</sup>にはこれが不思議<sup>ふしぎ</sup>であった。

三四郎<sup>さんしやうら</sup>は床<sup>とこ</sup>のなかで、この三<sup>みつ</sup>つの世界<sup>せかい</sup>を並<sup>なら</sup>べて、互<sup>たが</sup>いに比<sup>ひかく</sup>較<sup>かく</sup>してみた。次<sup>つぎ</sup>にこの三<sup>みつ</sup>つの世界<sup>せかい</sup>をかき混<sup>ま</sup>ぜて、そのなかから一<sup>ひと</sup>つの結果<sup>けつか</sup>を得<sup>え</sup>た。――要<sup>よう</sup>するに、国<sup>くに</sup>から母<sup>はは</sup>を呼<sup>よ</sup>び寄<sup>よ</sup>せて、美<sup>うつく</sup>しい細君<sup>さいくん</sup>を迎<sup>むか</sup>えて、そうして身<sup>み</sup>を学問<sup>がくもん</sup>にゆだねるにこしたことはない。

結果<sup>けつこ</sup>はすこぶる平凡<sup>へいぼん</sup>である。けれどもこの結果<sup>けつこ</sup>に到<sup>とう</sup>着<sup>ちやく</sup>するまえにいろいろ考<sup>かんが</sup>えたのだから、思索<sup>しやく</sup>の勞<sup>ろう</sup>力<sup>りよく</sup>を打<sup>だ</sup>算<sup>さん</sup>して、結論<sup>けつろん</sup>の價<sup>か</sup>値<sup>ち</sup>を上<sup>しょう</sup>下<sup>か</sup>しやすい思索家<sup>しやくか</sup>自身<sup>かじしん</sup>からみると、それほど平凡<sup>へいぼん</sup>ではなかった。

ただこうすると広<sup>ひろ</sup>い第三<sup>だいさん</sup>の世界<sup>せかい</sup>を眺<sup>びやう</sup>たる一<sup>いっこ</sup>個<sup>だいひやう</sup>の細君<sup>さいくん</sup>で代<sup>だい</sup>表<sup>ひやう</sup>させることになる。美<sup>み</sup>しい女性<sup>じよせい</sup>はたくさんある。美<sup>み</sup>しい女性<sup>じよせい</sup>を翻<sup>ほん</sup>訳<sup>やく</sup>するといろいろになる。――三四郎<sup>しやうら</sup>は広田先生<sup>ひろたせんせい</sup>にならつて、翻<sup>ほん</sup>訳<sup>やく</sup>という字<sup>じ</sup>を使<sup>つか</sup>ってみた。――いやしくも人<sup>じん</sup>格<sup>かく</sup>上<sup>じやう</sup>の言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>に翻<sup>ほん</sup>訳<sup>やく</sup>のできるかぎりには、その翻<sup>ほん</sup>訳<sup>やく</sup>から生<sup>しょう</sup>ずる感<sup>かん</sup>化<sup>か</sup>の範<sup>はん</sup>圍<sup>い</sup>を広<sup>ひろ</sup>くして、自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>の個<sup>こ</sup>性<sup>せい</sup>を全<sup>ぜん</sup>からしむるために、なるべく多<sup>おほ</sup>くの美<sup>み</sup>しい女性<sup>じよせい</sup>に接<sup>せつ</sup>触<sup>しょく</sup>しなければならぬ。細君<sup>さいくん</sup>一人<sup>ひとり</sup>を知<sup>し</sup>って甘<sup>あま</sup>んずるのは、進<sup>すす</sup>んで自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>の發<sup>はつ</sup>達<sup>たつ</sup>を不<sup>ふ</sup>完全<sup>かんぜん</sup>にするようなものである。

三四郎は論理をここまで延長して見て、少し広田さんにかぶれたなと思った。実際のところは、これほど痛切に不足を感じていなかったからである。

翌日学校へ出ると講義は例によってつまらないが、室内の空気は依然として俗を離れているので、午後三時までのあいだに、すっかり第二の世界の人となりおおせて、さも偉人のような態度をもって、追分の交番の前まで来ると、ぼったり与次郎に出会った。

「アハハハ。アハハハ」

偉人の態度はこれがためにまったくくずれた。交番の巡査さえ薄笑いをしている。

「なんだ」

「なんでもないものだ。もう少し普通の人間らしく歩くがいい。まるでロマンチック・アイロニーだ」

三四郎にはこの洋語の意味がよくわからなかった。しかたがないから、

「家はあったか」と聞いた。

「その事で今君の所へ行ったんだ——あすいよいよ引っ越す。手伝いに来てくれ」

「どこへ越す」

「西片町十番地への三号。九時までに向こうへ行って掃除をしてね。待っててくれ。あとから行くから。いいか、九時までだぜ。への三号だよ。失敬」

与次郎は急いで行き過ぎた。三四郎も急いで下宿へ帰った。その晩取って返して、図書館でロマンチック・アイロニーという句を調べてみたら、ドイツのシュレーゲルが唱えだした言葉で、なんでも天才というものは、目的も努力もなく、終日ぶらぶらぶらついていなくて、はだめだという説だと書いてあった。三四郎はようやく安心して、下宿へ帰って、すぐ寝た。

あくる日は約束だから、天長節にもかかわらず、例刻に起きて、学校へ行くつもりで西片町十番地へは行って、への三号を調べてみると、妙に細い通りの中ほどにある。古い家だ。

げんかん かわ せいようま ひと つ だ かぎ て ざしき ちゃ  
玄関の代りに西洋間が一つ突き出していて、それと鉤の手に座敷がある。座敷のうしろが茶  
の間で、茶の間の向こうが勝手、下女部屋と順に並んでいる。ほかに二階がある。ただし  
なんじょう  
何畳だかわからない。

さんしろう そうじ たの ひつよう みと  
三四郎は掃除を頼まれたのだが、べつに掃除をする必要もないと認めた。むろんきれいじゃな  
い。しかし何とって、取って捨てべきものも見当らない。しいて捨てれば畳建具ぐらいな  
ものだと考えながら、雨戸だけをあけて、座敷の椽側へ腰をかけて庭をながめていた。

おお ひやくじつこう ね となり みき はんぶんいじょう よこ すぎがき  
大きな百日紅がある。しかしこれは根が隣にあるので、幹の半分以上が横に杉垣から、  
こっちの領分をおかしているだけである。大きな桜がある。これはたしかに垣根の中には  
えている。その代り枝が半分往来へ逃げ出して、もう少しすると電話の妨害になる。菊が  
ひとかぶ かんぎく とみえて、いっこう咲いていない。このほかにはなんにもない。気の  
どく つち たい きめ こま うつく み  
毒なような庭である。ただ土だけは平らで、肌理が細かではなはだ美しい。三四郎は土を見て  
いた。じっさい土を見るようにできた庭である。

こうとうがっこう しき はじ な き くじ  
そのうち高等学校で天長節の式の始まるベルが鳴りだした。三四郎はベルを聞きながら九時  
がきたんだろうと考えた。何もしないでいても悪いから、桜の枯葉でも掃こうかしらんとよ  
うやく気がついた時、また箒がないということを考えだした。また椽側へ腰をかけた。かけ  
て二分もしたかと思うと、庭木戸がすうとあいた。そうして思いもよらぬ池の女が庭の中に  
あらわれた。

にほう いげがき しき しかく にわ とうつぼ た さんしろう せま かこ なか た  
二方は生垣で仕切っている。四角な庭は十坪に足りない。三四郎はこの狭い囲いの中に立つ  
た池の女を見るやいなや、たちまち悟った。――花は必ず剪って、瓶裏にながむべきもの  
である。

とき こし えんがわ はな おりど  
この時三四郎の腰は椽側を離れた。女は折戸を離れた。

しつれい  
「失礼でございますが……」

く ぼうとう お えしゃく うえ れい まえ う かお  
女はこの句を冒頭に置いて会釈した。腰から上を例のとおり前へ浮かしたが、顔はけっして  
さ  
下げない。会釈しながら、三四郎を見つめている。女の咽喉が正面から見ると長く延びた。  
どうじ め ひとみ うつ  
同時にその目が三四郎の眸に映った。



二、三日まえ三四郎は美学の教師からグルーズの絵を見せてもらった。その時美学の教師が、この人のかいた女の肖像はことごとくヴォラプチュアスな表情に富んでいると説明した。ヴォラプチュアス！ 池の女のこの時の目つきを形容するにはこれよりほかに言葉がない。何か訴えている。艶なるあるものを訴えている。そうしてまさしく官能に訴えている。けれども官能の骨をとおして髓に徹する訴え方である。甘いものに堪えうる程度をこえて、激しい刺激と変ずる訴え方である。甘いといわんよりは苦痛である。卑しくこびるのとはむろん違う。見られるもののほうがぜひこびたくなるほどに残酷な目つきである。しかもこの女にグルーズの絵と似たところは一つもない。目はグルーズのより半分も小さい。

「広田さんのお移転になるのは、こちらでございましょうか」

「はあ、ここです」

女の声と調子に比べると、三四郎の答はすこぶるぶっきらぼうである。三四郎も気がついていいる。けれどもほかに言いようがなかった。

「まだお移りにならないんでございますか」女の言葉ははっきりしている。普通のようにあとを濁さない。

「まだ来ません。もう来るでしょう」

女はしばしためらった。手に大きなバスケットをさげている。女の着物は例によって、わからない。ただいつものように光らないだけが目についた。地がなんだかぶつぶつしている。それに縞だか模様だかある。その模様がいかにもでたらめである。

上から桜の葉が時々落ちてくる。その一つが籃の蓋の上に乗った。乗ったと思ううちに吹かれていった。風が女を包んだ。女は秋の中に立っている。

「あなたは……」

風が隣へ越した時分、女が三四郎に聞いた。

「掃除に頼まれて来たのです」と言ったが、現に腰をかけてぼかんとしていたところを見られたのだから、三四郎は自分でおかしくなった。すると女も笑いながら、

「じゃ私も少しお待ち申しましょうか」と言った。その言い方が三四郎に許諾を求めるように聞こえたので、三四郎は大いに愉快であった。そこで「ああ」と答えた。三四郎の了見では、「ああ、お待ちなさい」を略したつもりである。女はそれでもまだ立っている。三四郎はしかたがないから、

「あなたは……」と向こうで聞いたようなことをこっちからも聞いた。すると、女は籃を椽の上へ置いて、帯の間から、一枚の名刺を出して、三四郎にくれた。

名刺には里見美禰子とあった。本郷真砂町だから谷を越すとすぐ向こうである。三四郎がこの名刺をながめているあいだに、女は椽に腰をおろした。

「あなたにはお目にかかりましたな」と名刺を袂へ入れた三四郎が顔をあげた。

「はあ。いつか病院で……」と言って女もこっちを向いた。

「まだある」

「それから池の端で……」と女はすぐ言った。よく覚えている。三四郎はそれで言う事がなくなった。女は最後に、

「どうも失礼いたしました」と句切りをつけたので、三四郎は、

「いいえ」と答えた。すこぶる簡潔である。二人は桜の枝を見ていた。梢に虫の食ったような葉がわずかばかり残っている。引越しの荷物はなかなかやってこない。

「なにか先生に御用なんですか」

三四郎は突然こう聞いた。高い桜の枯枝を余念なくながめていた女は、急に三四郎の方を振りむく。あらびっくりした、ひどいわ、という顔つきであった。しかし答は尋常である。

「私もお手伝いに頼まれました」

三四郎はこの時はじめて気がついて見ると、女の腰をかけている椽に砂がいっぱいたまっている。

「砂でたいへんだ。着物がよごれます」

「ええ」と左右をながめたぎりである。腰を上げない。しばらく椽を見回した目を、三四郎に移すやいなや、

「掃除はもうなすったんですか」と聞いた。笑っている。三四郎はその笑いのなかに慣れやすいあるものを認めた。

「まだやらないです」

「お手伝いをして、いっしょに始めましょうか」

三四郎はすぐに立った。女は動かない。腰をかけたまま、箒やはたきのありかを聞く。三四郎は、ただてぶらで来たのだから、どこにもない、なんなら通りへ行ってみようかと聞くと、それはむだだから、隣で借りるほうがよかろうと言う。三四郎はすぐ隣へ行った。さっそく箒とはたきと、それからバケツと雑巾まで借りて急いで帰ってくると、女は依然としてどの所へ腰をかけて、高い桜の枝をながめていた。

「あつて……」と一口言っただけである。

三四郎は箒を肩へかたいて、バケツを右の手へぶら下げて「ええありました」とあたりまえのことを答えた。

女は白足袋のまま砂だらけの椽側へ上がった。歩くと細い足のあとができる。袂から白い前だれを出して帯の上から締めた。その前だれの縁がレースのようにかがってある。掃除をするにはもったいないほどきれいな色である。女は箒を取った。

「いったんはき出しましょう」と言いながら、袖の裏から右の手を出して、ぶらつく袂を肩の上へかたいだ。きれいな手が二の腕まで出た。かたいだ袂の端からは美しい襦袢の袖が見える。茫然として立っていた三四郎は、突然バケツを鳴らして勝手口へ回った。

美禰子が掃くあとを、三四郎が雑巾をかける。三四郎が畳をたたきあいだに、美禰子が障子をはたく。どうかこうか掃除がひととおり済んだ時は二人ともだいぶ親しくなった。

三四郎がバケツの水を取り換えに台所へ行ったあとで、美禰子がはたきと箒を持って二階へ上がった。

「ちょっと来てください」と上から三四郎を呼ぶ。

「なんですか」とバケツをさげた三四郎が梯子段の下から言う。女は暗い所に立っている。前だけだけがまっしろ。三四郎はバケツをさげたまま二、三段上がった。女はじっとしている。三四郎はまた二段上がった。薄暗い所で美禰子の顔と三四郎の顔が一尺ばかりの距離に来た。

「なんですか」

「なんだか暗くってわからないの」

「なぜ」

「なぜでも」

三四郎は追窮する気がなくなった。美禰子のそばをすり抜けて上へ出た。バケツを暗い椽側へ置いて戸をあける。なるほど棧のぐあいがよくわからない。そのうち美禰子も上がってきた。

「まだあからなくって」

美禰子は反対の側へ行った。

「こっちはです」

三四郎は黙って、美禰子の方へ近寄った。もう少しで美禰子の手に自分の手が触れる所で、バケツに蹴つまずいた。大きな音をする。ようやくのことで戸を一枚あけると、強い日がまともにさし込んだ。まぼしいくらいである。二人は顔を見合わせて思わず笑い出した。

裏の窓もあける。窓には竹の格子がついている。家主の庭が見える。鶏を飼っている。

美禰子は例のごとく掃き出した。三四郎は四つ這いになって、あとから拭き出した。美禰子は箒を両手で持ったまま、三四郎の姿を見て、

「まあ」と言った。

やがて、箒を畳の上へなげ出して、裏の窓の所へ行って、立ったまま外面をながめている。そのうち三四郎も拭き終った。ぬれ雑巾をバケツの中へぼちちゃんとたたきこんで、美禰子のそばへ来て並んだ。

「何を見ているんです」

「あててごらんなさい」

「鶏ですか」

「いいえ」

「あの大きな木ですか」

「いいえ」

「じゃ何を見ているんです。ぼくにはわからない」

「私 さっきからあの白い雲を見ておりますの」

なるほど白い雲が大きな空を渡っている。空はかぎりなく晴れて、どこまでも青く澄んでいる。上を、綿の光ったような濃い雲がしきりに飛んで行く。風の力が激しいと見えて、雲の端が吹き散らされると、青い地がすいて見えるほどに薄くなる。あるいは吹き散らされながら、塊まって、白く柔かな針を集めたように、ささくれだつ。美禰子はそのかたまりを指さして言った。

「駝鳥の襟巻に似ているでしょう」

三四郎はボーアという言葉を知らなかった。それで知らないと言った。美禰子はまた、

「まあ」と言ったが、すぐ丁寧<sup>ていねい</sup>にボーア<sup>せつめい</sup>を説明してくれた。その時三四郎は、

「うん、あれなら知っとる」と言った。そうして、あの白い雲はみんな雪<sup>ゆき</sup>の粉<sup>こ</sup>で、下<sup>した</sup>から見てあのくらいに動く<sup>うご</sup>以上<sup>いじょう</sup>は、颶風<sup>ぐふう</sup>以上の速度<sup>そくど</sup>でなくてはならないと、このあいだ野々宮<sup>ののみや</sup>さんから聞いたとお<sup>おし</sup>りを教えた。美禰子は、

「あらそう」と言いながら三四郎を見たが、

「雪じゃつまらないわね」と否定<sup>ひてい</sup>を許<sup>ゆる</sup>さぬような調子<sup>ちょうし</sup>であった。

「なぜです」

「なぜでも、雲は雲でなくっちゃいけないわ。こうして遠<sup>とお</sup>くからながめているかいないじゃありませんか」

「そうですか」

「そうですかって、あなたは雪でもかまわなくって」

「あなたは高<sup>たか</sup>い所<sup>す</sup>を見るのが好き<sup>す</sup>のようすな」

「ええ」

美禰子は竹の格子の中<sup>ちく</sup>から、まだ空<sup>く</sup>をながめている。白い雲はあとから、あとから、飛<sup>と</sup>んで来る。

ところへ遠<sup>とお</sup>くから荷車<sup>にぐるま</sup>の音<sup>おと</sup>が聞こえる。今<sup>いま</sup>静<sup>しず</sup>かな横町<sup>よこちょう</sup>を曲<sup>ま</sup>がって、こ<sup>ちか</sup>っちへ近<sup>く</sup>づいて来るのが地響<sup>じびび</sup>きでよくわかる。三四郎<sup>さんしろう</sup>は「来た<sup>き</sup>」と言<sup>い</sup>った。美禰子<sup>みねこ</sup>は「早い<sup>はや</sup>のね」と言<sup>い</sup>ったまじっとしている。車<sup>くるま</sup>の音<sup>うご</sup>の動<sup>しろ</sup>くのが、白<sup>しろ</sup>い雲<sup>くも</sup>の動<sup>かんけい</sup>くのに関係<sup>かんけい</sup>でもあるように耳<sup>みみ</sup>をすましている。車<sup>あき</sup>はおちついた秋<sup>なか</sup>の中<sup>ようしゃ</sup>を容赦<sup>もん</sup>なく近<sup>まえ</sup>づいて来る。やがて門<sup>もん</sup>の前<sup>まえ</sup>へ来てとまった。

三四郎<sup>さんしろう</sup>は美禰子<sup>みねこ</sup>を捨<sup>す</sup>てて二階<sup>にかい</sup>を駆<sup>か</sup>け降<sup>お</sup>りた。三四郎<sup>さんしろう</sup>が玄関<sup>げんかん</sup>へ出<sup>で</sup>るのと、与次郎<sup>よじろう</sup>が門<sup>かど</sup>をはいるのとが同時<sup>どうじどうく</sup>同刻<sup>どうく</sup>であった。

「早<sup>こえ</sup>いな」と与次郎<sup>よじろう</sup>がまず声<sup>こえ</sup>をかけた。

「おそいな」と三四郎が<sup>こた</sup>答えた。美禰子とは<sup>はんたい</sup>反対である。

「おそいって、<sup>にもつ いちど だ</sup>荷物を一度に出したんだからしかたがない。それに<sup>ひとり</sup>ぼく一人だから。あとは  
<sup>げじょ くるまや</sup>下女と車屋ばかりでどうすることもできない」

<sup>せんせい</sup>「先生は」

<sup>がっこう</sup>「先生は学校」

<sup>ふたり はなし はじ</sup>二人が話を始めているうちに、車屋が荷物をおろし始めた。下女もはいつて来た。<sup>だいどころ</sup>台所の  
<sup>ほう たの</sup>方を下女と車屋に頼んで、与次郎と三四郎は<sup>しょもつ せいようま い</sup>書物を西洋間へ入れる。書物がたくさんある。  
<sup>なら ひとしごと</sup>並べるのは一仕事だ。

<sup>さとみ じょう</sup>「里見のお嬢さんは、まだ来ていないか」

「来ている」

「どこに」

「二階にいる」

<sup>なに</sup>「二階に何をしている」

「何をしているか、二階にいる」

<sup>じょうだん</sup>「冗談じゃない」

与次郎は本を一冊持ったまま、<sup>ろうかづた はしごだん した い れい</sup>廊下伝いに梯子段の下まで行って、例のとおりので、<sup>こえ</sup>声で、

「里見さん、里見さん。書物をかたづけるから、<sup>てつだ</sup>ちょっと手伝ってください」と言う。

<sup>いままい</sup>「ただ今参ります」

<sup>ほうき</sup>箒とはたきを持って、美禰子は<sup>しず お き</sup>静かに降りて来た。

「何をしていたんです」と下から与次郎が<sup>き</sup>せきたてるように聞く。

「二階のお掃除」と上から返事があった。

降りるのを待ちかねて、与次郎は美禰子を西洋間の戸口の所へ連れて来た。車力のおろした書物がいっぱい積んである。三四郎がその中へ、向こうむきにしゃがんで、しきりに何か読み始めている。

「まあたいへんね。これをどうするの」と美禰子が言った時、三四郎はしゃがみながら振り返った。にやにや笑っている。

「たいへんもなにもありやしない。これを部屋の中へ入れて、片づけるんです。いまに先生も帰って来て手伝うはずだからわけではない。——君、しゃがんで本なんぞ読みだしちゃ困る。あとで借りて行ってゆっくり読むがいい」と与次郎が小言を言う。

美禰子と三四郎が戸口で本をそろえると、それを与次郎が受け取って部屋の中の書棚へ並べるという役割ができた。

「そう乱暴に、出しちゃ困る。まだこの続きが一冊あるはずだ」と与次郎が青い平たい本を振り回す。

「だってないんですもの」

「なにないことがあるものか」

「あった、あった」と三四郎が言う。

「どら、拝見」と美禰子が顔を寄せて来る。「ヒストリー・オブ・インテレクチュアル・デベロップメント。あらあったのね」

「あらあったもないもんだ。早くお出なさい」

三人は約三十分ばかり根気に働いた。しまいにはさすがの与次郎もあまりせつつかなくなった。見ると書棚の方を向いてあぐらをかいて黙っている。美禰子は三四郎の肩をちょっと突ついた。三四郎は笑いながら、

「おいどうした」と聞く。



「うん。先生もまあ、こんなにいりもしない本を集めてどうする気かなあ。まったく人泣かせだ。いまこれを売って株でも買って置くともうかるんだが、しかたがない」と嘆息したまま、やはり壁を向いてあぐらをかいている。

三四郎と美禰子は顔を見合わせて笑った。肝心の主脳が動かないので、二人とも書物をそろえるのを控えている。三四郎は詩の本をひねくり出した。美禰子は大きな画帖を膝の上に開いた。勝手の方では臨時雇いの車夫と下女がしきりに論判している。たいへん騒々しい。

「ちょっと御覧なさい」と美禰子が小さな声で言う。三四郎は及び腰になって、画帖の上へ顔を出した。美禰子の髪で香水のにおいがする。

絵はマーメイドの図である。裸体の女の腰から下が魚になって、魚の胴がぐるりと腰を回って、向こう側に尾だけ出ている。女は長い髪を櫛ですきながら、すき余ったのを手に受けながら、こっちを向いている。背景は広い海である。

マーメイド  
「人魚」

「人魚」

頭をすりつけた二人は同じ事をささやいた。この時あぐらをかいていた与次郎がなんと思ったか、

「なんだ、何を見ているんだ」と言いながら廊下へ出て来た。三人は首をみつめて画帖を一枚ごとに繰っていった。いろいろな批評が出る。みんないいかげんである。

ところへ広田先生がフロックコートで天長節の式から帰ってきた、三人は挨拶をする時に画帖を伏せてしまった。先生が書物だけはやく片づけようというので、三人がまた根気にやり始めた。今度は主人公がいるので、そう油を売ることもできなかつたとみえて、一時間後には、どうか、こうか廊下の書物が書棚の中へ詰まってしまった。四人は立ち並んできれいに片づいた書物を一応ながめた。

「あとの整理はあしただ」と与次郎が言った。これではまんなさいといわぬばかりである。

「だいぶお集めになりましたね」と美禰子<sup>みねこ</sup>が言う。

「先生<sup>せんせい</sup>これだけみんなお読み<sup>よ</sup>になったですか」と最後<sup>さいご</sup>に三四郎<sup>さんしろう</sup>が聞いた。三四郎はじっさい参考<sup>さんこう</sup>のため、この事実<sup>じじつ</sup>を確か<sup>たし</sup>めておく必要<sup>ひつよう</sup>があったとみえる。

「みんな読めるものか、佐々木<sup>ささき</sup>なら読むかもしれないが」

与次郎<sup>よじろう</sup>は頭<sup>あたま</sup>をかいている。三四郎はまじめになって、じつはこのあいだから大学<sup>だいがく</sup>の図書館<sup>としょかん</sup>で、少しずつ本<sup>ほん</sup>を借りて読むが、どんな本を借りても、必<sup>かな</sup>ずだれか目<sup>め</sup>を通<sup>とお</sup>している。試し<sup>ため</sup>にアフラ・ベーンという人<sup>ひと</sup>の小説<sup>しょうせつ</sup>を借りてみたが、やっぱりだれか読んだあとがあるので、読書<sup>どくしょ</sup>範囲<sup>はんい</sup>の際限<sup>さいげん</sup>が知りたくなつたから聞いてみたと言う。

「アフラ・ベーンならぼくも読んだ」

広田先生<sup>ひろたせんせい</sup>のこの一言<sup>いちごん</sup>には三四郎も驚<sup>おどろ</sup>いた。

「驚いたな。先生はなんでも人の読まないものを読む癖<sup>くせ</sup>がある」と与次郎が言った。

広田は笑<sup>わら</sup>って座敷<sup>ざしき</sup>の方<sup>ほう</sup>へ行く。着物<sup>きもの</sup>を着換<sup>きが</sup>えるためだろう。美禰子もついて出<sup>で</sup>た。あとで与次郎が三四郎にこう言った。

「あれだから偉大<sup>いだい</sup>な暗闇<sup>くらやみ</sup>だ。なんでも読んでいる。けれどもちっとも光<sup>ひか</sup>らない。もう少し流行<sup>はや</sup>るものを読んで、もう少し出<sup>で</sup>しゃばってくれるといいがな」

与次郎の言葉はけっして冷評<sup>れいひょう</sup>ではなかった。三四郎は黙<sup>だま</sup>って本箱<sup>ほんばこ</sup>をながめていた。すると座敷<sup>ざしき</sup>から美禰子<sup>みねこ</sup>の声<sup>こえ</sup>が聞こえた。

「ごちそうをあげるからお二人<sup>ふたり</sup>ともいらっしやい」

二人<sup>ふたり</sup>が書斎<sup>しょさい</sup>から廊下<sup>ろうかづた</sup>伝いに、座敷<sup>ざしき</sup>へ来てみると、座敷のまん中<sup>なか</sup>に美禰子<sup>みねこ</sup>の持<sup>も</sup>って来<sup>き</sup>たバスケット<sup>バスケット</sup>が据<sup>す</sup>えてある。蓋<sup>ふた</sup>が取<sup>と</sup>ってある。中<sup>なか</sup>にサンドイッチがたくさんはいつている。美禰子はそのそばにすわって、籃<sup>かご</sup>の中<sup>ちゆう</sup>のものを小皿<sup>こざら</sup>へ取り分<sup>と</sup>けている。与次郎<sup>よじろう</sup>と美禰子<sup>みねこ</sup>の間答<sup>もんどう</sup>が始<sup>はじ</sup>まった。

「よく忘れ<sup>わす</sup>れずに持<sup>もつ</sup>ってきましたね」

「だって、わざわざ<sup>ごちゆうもん</sup>御注文ですもの」

「その<sup>バスケット</sup> 籃<sup>か</sup> も買ってきたんですか」

「いいえ」

「家<sup>うち</sup>にあったんですか」

「ええ」

「たいへん<sup>おお</sup>大きなものですね。車夫<sup>しゃふ</sup>でも連れてきたんですか。ついでに、少し<sup>すこ</sup>のあいだ<sup>お</sup>置いて  
働<sup>はたら</sup>かせればいいのに」

「車夫はきょうは<sup>つか</sup>使いに<sup>で</sup>出ました。女<sup>おんな</sup>だってこのくらいなものは持てますわ」

「あなただから持つんです。ほかのお<sup>じょう</sup>嬢さんなら、まあやめますね」

「そうでしょうか。それなら<sup>わたし</sup>私 もやめればよかった」

美禰子は<sup>みねこ</sup>食い物<sup>くもの</sup>を小皿<sup>こざら</sup>へ取りながら、与次郎<sup>よじろう</sup>と応対<sup>たいおう</sup>している。言葉<sup>ことば</sup>に少しもよどみがない。し  
かもゆっくりおちついている。ほとんど与次郎の顔<sup>かお</sup>を見ないくらいである。三四郎<sup>さんしろう</sup>は敬服<sup>けいふく</sup>  
した。

台所<sup>だいどころ</sup>から下女<sup>げじょ</sup>が茶<sup>ちゃ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>を持って来る。籃<sup>かご</sup>を取り巻いた連中<sup>れんちゆう</sup>は、サンドイッチ<sup>さんどういち</sup>を<sup>く</sup>食<sup>た</sup>い出した。少  
し<sup>すこ</sup>のあいだは静か<sup>しず</sup>であったが、思い<sup>おも</sup>出したように与次郎<sup>よじろう</sup>がまた広田先生<sup>ひろたせんせい</sup>に話<sup>はな</sup>しかけた。

「先生、ついでだからちょっと<sup>き</sup>聞いておきますがさっきのなんとかベーンですね」

「アフラ・ベーンか」

「ぜんたいなんです、そのアフラ・ベーンというのは」

「英国<sup>えいこく</sup>の閨秀<sup>けいしゆう</sup>作家<sup>さつか</sup>だ。十七<sup>じゅうなな</sup>世紀<sup>せいき</sup>の」

「十七<sup>じゅうなな</sup>世紀<sup>せいき</sup>は古<sup>ふる</sup>すぎる。雑誌<sup>ざっし</sup>の材<sup>ざいりょう</sup>料<sup>りょう</sup>にやなりませんね」

「古い。しかし職<sup>しよくぎょう</sup>業<sup>しよくぎょう</sup>として小説<sup>しょうせつ</sup>に従事<sup>じゅうじ</sup>したのはじめての女だから、それで有名<sup>ゆうめい</sup>だ」

「有名<sup>こま</sup>じゃ困<sup>うかが</sup>るな。もう少し伺<sup>か</sup>っておこう。どんなものを書いたんですか」

「ぼくはオルノーコという小説<sup>よ</sup>を読<sup>よ</sup>んだだけだが、小川<sup>おがわ</sup>さん、そういう名<sup>な</sup>の小説<sup>ぜんしゅう</sup>が全集<sup>ぜんしゅう</sup>のうちにあったでしょう」

三四郎はきれいに忘<sup>わす</sup>れている。先生<sup>こうがい</sup>にその梗概<sup>こうがい</sup>を聞いてみると、オルノーコという黒<sup>くろ</sup>ん坊<sup>ぼう</sup>の王族<sup>おうぞく</sup>が英国<sup>せんちよう</sup>の船長<sup>せんちよう</sup>にだまされて、奴隷<sup>どれい</sup>に売<sup>う</sup>られて、非常<sup>ひじよう</sup>に難儀<sup>なんぎ</sup>をする事<sup>こと</sup>が書いてあるのだそう<sup>うだ</sup>。しかもこれは作家<sup>じっけん</sup>の実見譚<sup>じっけん</sup>だとして後世<sup>こうせい</sup>に信<sup>しん</sup>ぜられているという話<sup>はなし</sup>である。

「おもしろいな。里見<sup>さとみ</sup>さん、どうです、一つオルノーコでも書<sup>ひと</sup>いちゃあ」と与次郎<sup>よじちろう</sup>はまた美禰子<sup>みねこ</sup>の方<sup>ほう</sup>へ向<sup>む</sup>かった。

「書いてもよござんすけれども、私<sup>わたし</sup>にはそんな実見譚<sup>じっけん</sup>がないんですもの」

「黒<sup>しゅじんこう</sup>ん坊<sup>しゅじんこう</sup>の主人<sup>しゅじんこう</sup>公<sup>ひつよう</sup>が必要<sup>ひつよう</sup>なら、その小川<sup>くん</sup>君<sup>くん</sup>でもいいじゃありませんか。九州<sup>きゅうしゅう</sup>の男<sup>おとこ</sup>で色<sup>いろ</sup>が黒<sup>くろ</sup>いから」

「口<sup>くち</sup>の悪<sup>わる</sup>い」と美禰子<sup>みねこ</sup>は三四郎<sup>べんご</sup>を弁護<sup>べんご</sup>するよう<sup>い</sup>に言<sup>い</sup>ったが、すぐあとから三四郎<sup>い</sup>の方<sup>い</sup>を向<sup>い</sup>いて、

「書いてもよくって」と聞<sup>き</sup>いた。その目<sup>め</sup>を見<sup>み</sup>た時<sup>とき</sup>に、三四郎<sup>おとりど</sup>はけさ籃<sup>おとりど</sup>をさげて、折戸<sup>おりど</sup>からあらわれた瞬<sup>しゅんかん</sup>間<sup>しゅんかん</sup>の女<sup>むすめ</sup>を思<sup>おも</sup>い出<sup>で</sup>した。おのずから酔<sup>よ</sup>った心地<sup>こころ</sup>である。けれども酔<sup>よ</sup>ってすくんだ心地<sup>こころ</sup>である。どうぞ願<sup>ねが</sup>いますなどとはむろん言<sup>い</sup>えなかつた。

ひろたせんせい れい タバコ だ よじろう ひょう はな てつがく けむり は  
広田先生<sup>ひろたせんせい</sup>は例<sup>れい</sup>によって煙草<sup>タバコ</sup>をのみ出<sup>だ</sup>した。与次郎<sup>よじろう</sup>はこれを評<sup>ひょう</sup>して鼻<sup>はな</sup>から哲学<sup>てつがく</sup>の煙<sup>けむり</sup>の吐<sup>は</sup>くと  
言<sup>い</sup>った。なるほど煙<sup>けむり</sup>の出方<sup>でかた</sup>が少<sup>すこ</sup>し違<sup>ちが</sup>う。悠然<sup>ゆうぜん</sup>として太<sup>ふと</sup>くたくましい棒<sup>ぼう</sup>が二本<sup>にほん</sup>穴<sup>あな</sup>を抜<sup>ぬ</sup>けて来<sup>く</sup>  
る。与次郎<sup>えんちゆう</sup>はその煙<sup>えんちゆう</sup>柱<sup>ちゆう</sup>をながめて、半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>背<sup>せ</sup>を唐紙<sup>からかみ</sup>に持<sup>も</sup>たしたまま黙<sup>だま</sup>っている。三四郎<sup>さんしろう</sup>の目<sup>め</sup>は  
ぼんやり庭<sup>にわ</sup>の上<sup>うえ</sup>にある。引<sup>ひ</sup>越<sup>こ</sup>しではない。まるで小集<sup>しょうしゅう</sup>のていに見<sup>み</sup>える。談話<sup>だんわ</sup>もしたがっ  
て気楽<sup>きらく</sup>なものである。ただ美禰子<sup>みねこ</sup>だけが広田先生<sup>ひろたせんせい</sup>の陰<sup>かげ</sup>で、先生<sup>せんせい</sup>がさっき脱<sup>ぬ</sup>ぎ捨<sup>す</sup>てた洋服<sup>ようふく</sup>を畳<sup>たた</sup>  
始<sup>はじ</sup>めた。先生<sup>せんせい</sup>に和服<sup>わふく</sup>を着<sup>き</sup>せたのも美禰子<sup>みねこ</sup>の所為<sup>しょうい</sup>とみえる。

いま はなし きみ まちが  
「今のオルノーコの話だが、君はそそっかしいから間違えるといけないからついでに言うがね」と先生の煙がちょっととぎれた。

「へえ、伺っておきます」と与次郎が几帳面に言う。

「あの小説が出てから、サザーンという人がその話を脚本に仕組んだのが別にある。やはり同じ名でね。それをいっしょにしちゃいけない」

「へえ、いっしょにしやしません」

洋服を畳んでいた美禰子はちょっと与次郎の顔を見た。

「その脚本のなかに有名な句がある。Pity's akin to love という句だが……」それだけでまた哲学の煙をさかんに吹き出した。

「日本にもありそうな句ですな」と今度は三四郎が言った。ほかの者も、みんなありそうだと  
言いだした。けれどもだれにも思い出せない。ではひとつ訳してみたらよかろうということになって、四人がいろいろに試みだがいっこうにまとまらない。しまいには与次郎が、

「これは、どうしても俗謡でいかなくっちゃだめですよ。句の趣が俗謡だもの」と与次郎らしい意見を提出した。

そこで三人がぜんぜん翻訳権を与次郎に委任することにした。与次郎はしばらく考えていたが、

「少しむりですがね、こういうなどうでしょう。かあいそうだとほれたってことよ」

「いかん、いかん、下劣の極だ」と先生がたちまち苦い顔をした。その言い方がいかにも下劣らしいので、三四郎と美禰子は一度に笑い出した。この笑い声がまだやまないうちに、庭の木戸がざいと開いて、野々宮さんがはいつて来た。

「もうたいい片づいたんですか」と言いながら、野々宮さんは椽側の正面の所まで来て、部屋の中にいる四人をのぞくように見渡した。

「まだ片づきませんよ」と与次郎がさっそく言う。

「少し手伝っていただきませんか」と美禰子が与次郎に調子を合わせた。野々宮さんはにやにや笑いながら、

「だいぶにぎやかなようですね。何かおもしろい事がありますか」と言って、ぐるりと後向きに椽側へ腰をかけた。

「今ぼくが翻訳をして先生にしかられたところです」

「翻訳を？　どんな翻訳ですか」

「なにつまらない——かわいそうだとほれたってことよというんです」

「へえ」と言った野々宮君は椽側で筋かいに向き直った。「いったいそりやなんですか。ぼくにや意味がわからない」

「だれだってわからんさ」と今度は先生が言った。

「いや、少し言葉をつめすぎたから——あたりまえにのぼすと、こうです。かあいそうだとほれたということよ」

「アハハハ。そうしてその原文はなんというのです」

「Pity's akin to love」と美禰子が繰り返した。美しいきれいな発音であった。

野々宮さんは、椽側から立って、二、三步庭の方へ歩き出したが、やがてまたぐるりと向き直って、部屋を正面に留まった。

「なるほどうまい訳だ」

三四郎は野々宮君の態度と視線とを注意せずにはいられなかった。

美禰子は台所へ立って、茶碗を洗って、新しい茶をついで、椽側の端まで持って出る。

「お茶を」と言ったまま、そこへすわった。「よし子さんは、どうなすって」と聞く。

「ええ、からだのほうはもう回復しましたが」とまた腰をかけて茶を飲む。それから、少し先生の方へ向いた。

「先生、せっかく大久保へ越したが、またこっちの方へ出なければならぬようになりそうです」

「なぜ」

「妹が学校へ行き帰りに、戸山の原を通るのがいやだと言いだしましてね。それにぼくが夜実験をやるものですから、おそくまで待っているのがさむしくていけないんだそうです。もともと今のうちは母がいるからかまいませんが、もう少しして、母が国へ帰ると、あとは下女だけになるものですからね。臆病者の二人ではどうていしんぼうしきれないのでしょう。——じつにやっかいだな」と冗談半分の嘆声をもらしたが、「どうです里見さん、あなたの所へでも食客に置いてくれませんか」と美禰子の顔を見た。

「いつでも置いてあげますわ」

「どっちです。宗八さんのほうをですか、よし子さんのほうをですか」と与次郎が口を出した。

「どちらでも」

三四郎だけ黙っていた。広田先生は少しまじめになって、

「そうして君はどうする気なんだ」

「妹の始末さえつけば、当分下宿してもいいです。それでなければ、またどこかへ引っ越さなければならぬ。いっそ学校の寄宿舎へでも入れようかと思うんですがね。なにしろ子供だから、ぼくがしじゅう行けるか、向こうがしじゅう来られる所でないと困るんです」

「それじゃ里見さんの所に限る」と与次郎がまた注意を与えた。広田さんは与次郎を相手にしない様子で、

「ぼくの所の二階へ置いてやってもいいが、なにしろ佐々木のような者がいるから」と言う。

「先生、二階へはぜひ佐々木を置いてやってください」と与次郎自身が依頼した。野々宮君は笑いながら、

「まあ、どうかしましょう。――身長ばかり大きくなってばかだからじつに弱る。あれで団子坂の菊人形が見たいから、連れていけなんて言うんだから」

「連れていっておあげなさればいいのに。私だって見たいわ」

「じゃいっしょに行きましょうか」

「ええぜひ。小川さんもいらっしゃい」

「ええ行きましょう」

「佐々木さんも」

「菊人形は御免だ。菊人形を見るくらいなら活動写真を見に行きます」

「菊人形はいいよ」と今度は広田先生が言いだした。「あれほどに人工的なものはおそらく外国にもないだろう。人工的によくこんなものをこしらえたところを見ておく必要がある。あれが普通の人間にできていたら、おそらく団子坂へ行く者は一人もあるまい。普通の人間なら、どこの家でも四、五人は必ずいる。団子坂へ出かけるにはあたらぬ」

「先生一流の論理だ」と与次郎が評した。

「昔教場で教わる時にも、よくあれでやられたものだ」と野々宮君が言った。

「じゃ先生もいらっしゃい」と美禰子が最後に言う。先生は黙っている。みんな笑いだした。

台所からばあさんが「どなたかちよいと」と言う。与次郎は「おい」とすぐ立った。三四郎はやはりすわっていた。

「どれぼくも失礼でしょうか」と野々宮さんが腰を上げる。

「あらもうお帰り。ずいぶんね」と美禰子が言う。



「このあいだのものはもう少し待<sup>すこ</sup>てくれ<sup>ま</sup>たまえ」と広田先生が言うのを、「ええ、ようござんす」と受<sup>う</sup>けて、野々宮<sup>にわ</sup>さんが庭から出ていった。その影<sup>かげ</sup>が折戸<sup>おりど</sup>の外<sup>そと</sup>へ隠<sup>かく</sup>れると、美禰<sup>きぬ</sup>子は急<sup>きゆう</sup>に思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>したように「そうそう」と言いながら、庭先<sup>にわさき</sup>に脱<sup>ぬ</sup>いであつた下駄<sup>げた</sup>をはいて、野々宮<sup>にわ</sup>のあとを追<sup>お</sup>いかけた。表<sup>おもて</sup>で何<sup>なに</sup>か話<sup>はな</sup>している。

三四郎は黙<sup>もく</sup>ってすわ<sup>すわ</sup>っていた。